

第24回ミツバチ科学 研究会に参加して

人見 吉昭

最初に吉田教授による開会の挨拶があり、昨年先生が研究で訪ねられた中国雲南省と国境を接するベトナム北部ライチャウ省の少数民族の村でのミツバチの話で始まった。小生の趣味のミツバチも玉川大学のこの研究会の翌日が「今年の出発点」と毎年決めて、給餌もこの会にあわせているのが毎年の恒例となっている。

最初の発表は、赤松えり子さんの「ミツバチの脱糞行動」で、私自身が昨年、加害者となった苦い経験もあってとても注目した研究発表であった。日蜂協への苦情の約50%が糞害と聞き、蜂場から200m以内が最多の加害エリアとの研究発表であった。私の場合もその通りで、また定位非飛行時、特に雨上がり時の脱糞が相当の害を与えるなど、室内、外での根気と非常に手間の要した研究と思われた。市民からの糞害に苦労している私の住んでいる市の環境係の方にも資料を見せてあげたいくらいであった。

次に星野夏生さんの「腐蛆病予防薬のミツバチ生産物への移行と残留」であったが、現在唯一この病気に対して認められているアピテンが貯蜜、ローヤルゼリーへの薬剤移行と残留についての安全性の考察であった。最終的には、ミロサマイシンの有効性を見出した吐山先生の安全性の追認と思われ、使用説明書通りに投薬すれば問題はないとの事であった。注目点はローヤルゼリー中には休薬期間を過ぎても微量だが移行が認められ、これは働き蜂を経由しての移行と推測され休薬期間の延長が不可欠との発表であったが、今後の更なる研究の必要を感じたのは私だけではないであろう。

午後の日本照射サービス㈱の高橋富男さんと(株)畜産生物科学安全研究所の片岡敦子さんに



特別講演中の松本忠夫教授

る講演も腐蛆病関連のものであった。こちらは放射線、ガンマ線による消毒で、画期的な効果が認められる方法であるが、まだまだ煩雑で、現段階で素人の我々の蜂具を消毒、殺菌するには時期尚早の段階と思われた。ただこの厄介な菌はアメリカを震撼させた生物兵器の炭素菌とほぼ同じ細菌類と聞き、侮れない強力な菌であることが再認識させられ、将来更に手軽に利用できるようになることが望まれた。

最後に東大の松本忠夫教授による「社会性昆虫の繁栄の秘密」の講演があった。昨年私の大事なニホンミツバチの巣箱をボロボロにした「悪い奴」のシロアリであるが、「このアリはなにをしているのだろう」との疑問を持ちつづけていたため、この「悪い奴」を知ることができるとも良い機会が持つことができた。メス、オスの一対から数百万に増え、巣は動物では最大級になり巨大な巣というより立派な城のような巣の写真は圧巻であった。カースト分化された仕事の中心は地球上の掃除であり、仲間の死骸から糞まで利用し尽くし、固いセルロースも体内のバクテリアで分解し、空気中の窒素まで取り込み、さらに巣内ではミツバチ同様、冷房機能まで備えているというから驚かされた。また地球上には色の黒いシロアリがいるのは初耳であり、また地上の昆虫の三分の一がアリで、三分の一がシロアリでこのシロアリの進化したものがアリ・ミツバチとのことであった。地球環境が問題になっている昨今、この知恵をシロアリから学ぶことになる時代が訪れるのかと思うほど印象的であった。

(〒183-0002 府中市多磨町 4-628)